

## 「カイロ団長」周辺考

頼 富 雅 樹

「カイロ団長」は宮澤賢治の童話で、数ある生前未発表作の一つである。草稿には「動物寓話集中」の文字が記されている。他に同じ書き込みがあるのは「ツェねずみ」と「蛙のゴム靴」である。

「カイロ団長」はこれまで、論じられることが少なかった。さらにその結末については、ちくま文庫版解説で「デウスエクスマキナ」的であるとされているように、作品自体評価されにくい現状がある。本稿の主たる目的は、「カイロ団長」研究の前提となる、作品周辺の考察とする。

### 二

タイトルに取られている「カイロ団長」は、作中でとのさまがえるが自称する名である。この「カイロ」という語はどこから来

ているのだろうか。これについて赤羽学は、『カイロ』は、三十疋のあまがえるととのさまがえるの話であるから、かえるを方言風に訛って『カイロ』としたのである<sup>1)</sup>と述べている。赤羽氏は「カイロ」の語に注を付し、『日本国語大辞典』の『かいろ』の条に、『銀の匙』へ中勘助前三一『かいろが鳴いたからかあいろ』の例があがる<sup>2)</sup>としている。

宮澤の作品である「イーハトーボ農学校の春」では、「カイロ男爵だって早く上等の絹のフロックを着て明るいとこへ飛び出すがいいでしょう」という一文で「カイロ」の語が使われている。これは蛙の体表が陽光に照らされ輝くさまを、絹の輝きに準えたものと考えられる。これにより「カイロ」が「蛙」の意味であると推測することは不自然ではあるまい。

ただし、赤羽氏の挙げている『日本国語大辞典』中の中勘助は東京で生まれ育った人であることに注意したい。さらに岩手の方言では、蛙のことを「びつき」といい、「かいろ」とは言わ

ないことにも留意する必要がある。蛙を「かいろ」という方言は——宮城県登米郡、石川県鳳至郡柳田村久田、岐阜県、三重県南牟婁郡相野谷村、大分県南海部郡に——あるが、岩手ではないことを考えると、「カイロ団長」での「カイロ」を方言風な訛りと断定するのは速断にすぎるのではないか。

ここでは他の可能性も提示しておきたい。第一に、「カイロ団長」の「カイロ」は、「カエル」をエスペラント風に改変したと考えるものだ。蛙をそのままエスペラント語に直すと、「fano」、または「anuro」であるが、それはひと先ず置いておく。エスペラント語では、名詞が<sup>o</sup>の音で終わる。その為「カエル」は「カエロ」となる。また、最後から二番目の音にアクセントが置かれることから、「カエーロ」に近い形を経て「エ」が「イ」に転訛、「カイロ」になったと考えられる。宮澤は『改造』一九二二（大正十一年八月号）の「エスペラント語研究」特集記事を読むなどし、独習を始めたとされる為、時期的にもおかしくない。

蛙たちの名前は個性的である。作中のあまがえるの名「ピチュコ」も「蛙」を岩手の方言にした「びっき」から派生したものであろうことは先行研究で指摘されている。「チェック」については、計算する様子から、「照合する」の意を持つ「check」が基本であると考えられる。ここでもエスペラント風改変説を用いることで、「びっき」から「ピチュコ」へ、「check」から「チェック」

への改称についても同じように説明づけることができる。もっとも、名前に関しては単に「〜こ」とつける慣習があった為とも考えられる。「さいかち淵」で「舜一」が「しゅっこ」と呼ばれていたように、宮澤にとって力みのない命名なのかもしれない。

二つ目は「薙露」つまり薙の葉の上の露とかけたというものである。『日本国語大辞典』には「人の世や命のはかないこと、人の死、またはそれを悲しむ涙などという。中国、漢代の田横が自殺したとき、その門人たちの悲しみの歌の中にこの語があったところから、葬送の時にうたう歌、すなわち挽歌の意にもいう」とある。とのさまがえるが「カイロ団長」として権勢をふるえた時間の短さは悲劇的である。あまがえるがとのさまがえるを笑ったままで結末を迎えられなかったように、この作品が悲しみを湛えている点は間違いない。

作品の主な登場人物は、あまがえると、とのさまがえるである。蛙というモチーフがなぜ採用されたのか。次に蛙に関するものを見ていくことにする。荘子「秋水 第十七」にはこうある。

（原文）井甃不可以語於海者、拘於虛也。夏蟲不可以語於冰者、篤於時也。曲士不可以語於道者、束於教也。

（訓読文）井甃の以て海を語る可からざる者は、虚に拘ればなり。夏虫の以て氷を語る可からざる者は、時に篤ければなり。曲士の以て道を語る可からざる者は、教えに束ねら

るればなり。

(現代語訳) 井の中の蛙に海のことを話しても仕方がないというの、蛙が狭い自分の住処にならずにいるからだ。夏の生命しか持たない虫に氷のことを話しても仕方がないというの、夏の虫が自分の生きていくわずかな時だけを全くと信じているからだ。それと同じく、見識の狭い人物に大道のことを話しても仕方がないというのは、彼が世間的な教えに縛りつけられているからだ。

周知の「井の中の蛙」の典故であるが、同じ大正期に芥川龍之介の書いた「蛙」(一九一七)の場合も似た意味でとらえることができる。蛙には井蛙としてのイメージがあり、これはそのまま「カイロ団長」にも当てはめることが出来る。日頃楽しい仕事をする生活にあるあまがえるたちは、その生活の外にある搾取者の存在を知らない。そんな彼らがとのさまがえるの店に足を踏み入れた時どうなるのか。作品には井から出た蛙の体験が描かれている。ただし、宮澤は童話「虔十公園林」のように、ものを知らない人間が大きな仕事をする「イワンのばか」式の作品を書いている。従って、井から出た蛙を懲らしめる、アイロニカルな意図があったとは考えにくい。

草野心平は宮澤の死後、全集の出版に関わった人物である。草野は蛙に関する詩を多く残している。宮澤との直接の対面は

なかったようだが、生前に書簡が交わされている。『第百階級』(一九二八)は宮澤の生前に発表されている草野の詩集である。他に『明日は天気だ』等があるが、蛙を主題にした詩集ではない。大正期に書かれた、『銅鑼一』『失恋者と蛙』『銅鑼二』の「青い水たんぼ」、『紀元』の「春・人物と蛙の風景」と、『第百階級』がやはり重要である。ただし、佐藤泰正編『宮沢賢治必携』(一九八一)では、「カイロ団長」の項に「現存草稿の執筆は大10あるいは大11か」とあるように、執筆時期とその推定の根拠は定かではない。草野の作品からの影響を断定することは、現時点では難しい。ただ、以下のことは指摘できる。

草野心平全集第一巻『第百階級』二六頁―二八頁には、「蛙は地べたに生きる天国である」という詩が書かれている。これは「カイロ団長」で、蛙たちが楽しく仕事をし、その楽しい仕事に戻って終わることを連想させる。さらに、序と「秋の夜の会話」の間にある前書き部分にも「蛙はでつかい自然の讃嘆者である／蛙はどぶ臭いプロレタリアトである／蛙は明朗なアナリスト／地べたに生きる天国である」とあり、宮澤に影響したとまでは言えずとも、貴重な、当時の作家の蛙観が展開されている。この内「プロレタリアト」つまり無産階級という語は、「カイロ団長」にそのまま当てはめてみることも出来る。「カイロ団長」では、あまがえる達に加え、とのさまがえるもまたブルジョワジーではない。ともあれ、『第百階級』は「カイロ団長」研究において示唆

に富んだものである。

登場する蛙には、あまがえると、とのさまがえるの二種類がある。とのさまがえるはあまがえるを捕食することもある生物であり、それがカイロ団長とあまがえるたちの関係性にそのまま影響している。また、童話の初めに、あまがえるが「蟻の公園地」を仕上げていること、王様の「鳥の国へ引き渡す」という刑罰にも注意しておきたい。あまがえるは本来捕食するはずの蟻を食べずに、公園まで作っているのである。本作にも、賢治の他の童話と同じように捕食、被捕食のテーマが描かれている。

### 三

「カイロ団長」のモデルについては、『米騒動』として全国に波及するに至った寸前の姿さえ、偲ばせるものがある（続橋達雄）、「団長はさしあたり零細農をしぼり上げる地主である」（小沢俊郎）等の、当時の社会状況に基づいた先行研究がある。しかし、「偲ばせる」や「さしあたり」といった語を用い言及するに止まり、いずれも正確な考証に基づくものではない。

私見では、監獄部屋、あるいは北海道開拓におけるタコ部屋こそ「カイロ団長」のモデルである。そのいずれかまで特定することは出来ないが、その労働の様が作品と似通っていることから推察した。以下はタコ部屋について書かれた資料である。

タコ労働が北海道開発の主軸になった。タコ部屋は、明治二十三年（一八九〇）、北炭経営の石炭輸送鉄道室蘭線の工事で発生（中略）大正期に最盛期を迎え（中略）タコ部屋より「監獄の方がまだましだ」と言って、監獄志願の殺傷事件さえ発生した。拘禁され、十四時間以上も棒頭（幹部）に「追い回され」

（中略）

「高賃金と前借金支給」で失業者などを釣り

この資料で見られる、「監獄の方がまだましだ」という点は、あまがえるが「みんなやけ糞になって叫びました。』どうか早く警察へやって下さい。シュッポン、シュッポンと聞いていると何だか面白いような気がします。』という点と繋がる。さらに幹部の棒頭という語はとのさまがえるが棒を持ってあまがえるたちの頭をたたいたことを想起させる。また、「前借金支給」はまさにとのさまがえるがウイスキーを飲ませ続けた手法である。

文献を当たると、「カイロ団長」と同じ労働形態でも、それぞれ用いる語が異なることが分かる。「タコ部屋」の語を『日本国語大辞典』で引くと、「第二次世界大戦前、北海道や樺太の炭鉱にみられた飯場制度。労働者を飯場に収容して、重労働を強制したものの。飯場に入ったら、たこつぼのタコのように抜けられないというところからいう」とある。井伏鱒二『駅前旅館』（一九六〇）

の一節「この味山田という人は、たこ部屋の親方だということでした」が引用されている。また、「監獄部屋」については、「監獄のように、一度はいると容易にぬけ出られず、また扱いが冷酷であったところから）鉱山・鉄道工事などの人夫部屋。明治・大正時代に、労働が親方の手によって供給されたところに存在した」とある。引用として江口渙『彼と彼の内臓』（一九二七）「何度もぼん引きに引っ懸って北九州の炭坑の監獄部屋へ売られた事や」と、徳田秋声『縮図』（一九四二）素描・五「監獄部屋でも脱出するやうな気持で」という文章が同書に載っている。「土工・土功」では「②土木工事などに従事する労働者。\*明六雑誌一六号・知説二〈西周〉『鉄工あり銅工あり漆工あり土工あり、以て能工工を全うす』\*道程〈高村光太郎〉冬ノ詩・三『土工よ、人足よ、職工よ』\*嬰兒ごろし〈山本有三〉『ふム、で、おまえが土工になったのはそれからか』とある。「土工」の語を用いる『冬ノ詩』は一九一三（大正二）年、『嬰兒ごろし』は一九二〇（大正九）年の作である。しかし、「タコ部屋」や「監獄部屋」の語は『彼と彼の内臓』の一九二七（昭和二）年を待たなければならぬようだ。「カイロ団長」が一九二一（大正十）年または一九二二（大正十一）年の作で、かつ「監獄部屋」「タコ部屋」を描いた作品であるならば、「監獄部屋」の語自体は用いずとも題材にしたのは比較的早いということになる。

『新聞集録大正史第十五卷』は一九二二（大正十一）年の新聞

記事を記載している。これによると六月二十三日付大阪朝日新聞（現朝日新聞西日本地区の旧題）に「死より苦しい體驗に泣暮らす『監獄部屋』欺かれて都會から攫れる敗者」との見出しで記事が載っている。

東京本所入江町市営労働職業紹介所の曾山義彦氏は、先月来東北地方の監獄部屋土工人夫の虐げられた生活状態の視察に出かけたが、中でも有名な羽越北線折渡し鉄道工事現場、羽越南線、猪苗代水電、鬼怒川水電等四箇所二千二百人の悲惨な現状を調べて来た。

監獄部屋は又の名を地獄部屋とも稱され文字通り普通の人の寄りつけもせぬ恐ろしい世界だ。

（中略）

監獄部屋の土工人夫は全部東京、大阪、横濱等都會に失業して途方に暮れた人が非常な巧妙な手段で欺かれ騙されて集められたものである。

「監獄部屋」の名で西日本の人には周知されたとわかる。ただし、あまがえるたちは失業したわけではない。やはり作品を論じる資料としては遠いだろう。七月二十五日東京日日新聞（現毎日新聞東日本地区の旧題）には「監獄部屋の記事を読んだ北海道の某職員の手紙」という見出しがある。同紙の十八日第一六四五四

号九面にも監獄部屋についての記事が載り、ここではそれに対する読者の反応が書かれている。

東北地方における土木工事請負者の人夫虐待に関する所謂監獄部屋の記事は、多数読者の全く意外とする處であつたらしく、其後いろいろ同情の手紙を寄せられたが、ことに北海道の一鉄道従事員は日々々此等憐むべき犠牲者の往復を目撃するにつけて、本紙の記事に非常に感謝の意を表すると共に驚くべき見聞を寄せられた。

左に其の一節を採録する。

(中略)

近ごろは殆ど毎日の様函館發午後二時五分の列車にて卅人或ひは五十人一團となり数名の棒頭に引率され

(中略)

大正の今日監獄部屋は夙に官憲の知る所なるも末葉の警吏は何故や見て見ぬ振りをなし、一切警察の手の入り得ざるは不思議の一に候

人夫虐待は当時の人に意外であつたことから、宮澤もほぼ同時期に知つたものと思われる。ともすれば、これまで一九二二(大正十)年もしくは一九二二(大正十一)年と見られてきた制作者も一九二二(大正十一)年以降とすることが出来、特に記事

の載つた一九二二(大正十一)年の可能性は高い。また、宮澤が文献だけでなく実際に見聞して監獄部屋についての何らかを知つたということも考えられる。

鉄道従事員の手紙には三十人或いは五十人の数字があり、先の大坂朝日新聞の記事内にも「其の一部屋に三十人乃至六十人がうご蟲のやうに蠢いて居る」とある。これも賢治の見聞や読んだ文献次第だが、カイロ団長のあまがえるが「三十疋」であり、数字の一致は偶然にしろ、おおよその人数規模は同じだと言える。宮澤の童話には突飛に見える数字が散見するが、この箇所では史実に基づいた数字だと考えられる。

筆宝康之は、「建設業における労資関係制度―『監獄部屋』をめぐって―」で、司法省調査を用いて、「監獄部屋」の職制機構をまとめている。ここでの「監獄部屋」は、「北海道・樺太・東北地方など日本資本主義の北辺辺境、植民地、僻地における拓殖開発進展過程で形成された建設業の請負飯場制度の一形態であり、拘禁制置と強制労働の機構に転化した『土工部屋』或いは『人夫部屋』に対する呼称であつた(中略)明治後期から昭和前期を通じて、北海道・樺太における最大の社会問題であり、労働問題であつた」とされている。「監獄部屋」の職制機構の内、「(棒頭)の項には「現場では常時棒(尺杖)を携えて土工の勤怠を監視督励(中略)道内で叩きあげた恐るべき腕力と度胸と野蠻残忍性を持って『牛馬の如き』酷使虐待の殺傷事件を起す『監獄部

屋現出の最大原因』をなし、土工夫の最も恐れる存在であった」とある。これを見る限りでは、棒を持ってあまがえるたちの頭を叩くカイロ団長は、この「棒頭」にあたる。

しかし、〔管理人〕の項には「元請人から分割工事を請負う下請人で飯場の経営者であり、一つの組の統帥者として収容土工夫に対し殆んど生殺与奪の権を持ち、部屋一切の事務（時に募集業務も）を統括し、『親方』『部屋頭』と呼ばれた」とある。作中の「誰もカイロ団に仕事を頼みに来ませんでした」といった表現によって、カイロ団は与えられる仕事をこなす団体であることが示されている。つまりカイロ団長は監獄部屋における「管理人」と「棒頭」双方の役割を負っているといえる。宮澤の仕入れた監獄部屋に関する知識が乏しかったのか、童話構成のためにあえてこうしたのかについては、今後更なる研究が必要となろう。

他に監獄部屋と「カイロ団長」の一致する点も押さえておく。土工夫の人生観と慰安について「一日の疲労困憊から彼らを蘇生させたのは、鉄腕一合分だけ許され一呼吸にあおる夕食時の冷酒にすぎなかった」とある。これは仕事終わりに飲ませられた一杯のウイスキーと重なる。

さらに前掲同論文中の、北海道総合経済研究所の方波見雅夫談、大正末年当時石狩平野の米作中核地帯空知の灌漑溝開墾工事での目撃事例には、「当工事はすべてタコ人夫によりなされた。

（中略）彼らはいずれも募集人の誘惑に乗るほど朴訥善良な人々

であり、娘を身売りに出す迄負債前借金 of 債務奴隷となった東北出身の極貧農が多かった。おそらくストリートに東北地方から募集されたのではないか。タコ部屋の内部は差別観が上下に貫かれ、附近住民もタコ人夫を別人とみていた」とある。あまがえるたちの性格は朴訥そのものである。あまがえるはウイスキーを飲み前借金を抱える。そして、先に挙げた東北での労働と違い、北海道での労働の為にも、東北から多くの人を連れて来ていたという事実が語られている。

こうした作品中の記述と資料との比較対照は、確実に宮澤が参考にしたという証拠を示していない以上、あくまで、作品の新たな読みの可能性を探り、今後の研究のための探究として提言しておくものである。

補遺として、宮澤が目にしたであろう資料を載せておく。岩手県立図書館にマイクロフィルムで所蔵されている岩手の地方紙「岩手日報」大正期の記事である。宮澤が読んだ新聞としては、対馬美香「宮沢賢治新聞を読む——社会へのまなざしとその文学」に「岩手日報」、「岩手毎日新聞」、「時事新報」が挙げられている。ここで、筆者の管見に入った大正期の「岩手日報」から、宮澤の作品を踏まえて読むと興味深い記事について複数紹介しておきたい。

大正十一年六月二十日岩手日報五面

追ッ手の土工を斬つた

好雄の公判

市街北山鐵（鐵？）道工事請負人小林和平を裏切り二戸郡金田一村に脱走せんとする處を追ッ手の土工矢崎徳重（三三）に發見毆打さるゝや之が報復の爲隠し持ちたる短刀にて相手の脾腹を抉りて瀕死の重傷を負はせたる原籍秋田縣北秋田郡上小阿仁村土工漁業法違反前科一犯好雄事萩野作五郎（三二）は傷害罪として十六日盛岡區裁判所に起訴されたるが来る二十三日須藤判事森檢事の係にて公判開廷すべく引續き佐藤醫院に入院中の被害者は其後腹膜炎を併發せるも病狀輕微にして食欲便通あれば一命は取止め得べしといふ

大正十一年六月二十一日岩手日報五面

悲惨を通り越した地獄部屋的生活

粗末な食事と監視附の虐待を何うすることも出來ずに居る

二千二百の土工連

東京市本所區入江町勞働職業紹介所曾山芳彦氏は先月東京を出發東北地方の所謂監獄部屋に時代遅れな生活をしてゐる土工全部（一字不明）状態を詳細に視察して歸つたが中でも洵に悲惨なのは羽越北線折渡鐵（鐵？）道工事羽越南線猪苗代鬼怒川水電の、四箇所の工事に着手してゐる土工二千二百名の生活で詳細に視察して來た氏は語る『其監

獄部屋なるものは別の名を地獄部屋と稱せられ普通の人の寄付き得ない程恐ろしい所だ自分は白シャツ一枚と半ズボンに黒の冬服を引つ掛て何處から見ても土工の親分と間違へられるやうな服装で飽く迄御免下さいを邊り嫌（一字不明）ずお世辭云つて廻つたのである監獄部屋に生活してゐるものは東京大阪横濱などの大都市の財界不況の結果

失業した人々で其多数は不況知らずの事業ありと欺かれ虎口に引摺込まれたものである最も二千二百人の半数は無識階級のものである、が他の半数は小學校教員洋服商時計屋其他知識階級に属する人の多かつたことだ、彼等の寝起する所はバラック式の粗末な建物の中に藁を敷夜具は上下二枚の煎餅布團に差し違つて二人寐る窓も僅か三つばかりの小さながあつて其入口には一名の見張が嚴重に監視し巧に

逃亡を防いでゐる其一部屋の中には三十人乃至六十人押し籠められて身動きも出來ず恰度蛆虫のやうな有様である食事はと見ると朝は切干大根の味噌汁九時には四つ飯といふので出る是れは一合五勺位の小握り飯二個に切漬を與へられる晝飯も同様の八つ飯に切漬晩飯も味噌汁に切漬で飢えを凌いでゐる斯うした献立を繰返され斯かる虐待に何れも普通人の知ることの出來ぬ

惱みの中に何うする事も出來ずにゐるある時自分は土工

の買い上げに來たものと間違ひられて喧嘩をぶつかけられ、命からく逃出した事もあつた給料は一日一圓二十錢支給する規定であるが夫はほんの名ばかりで工場監督や請負人の手段に依つて（四字不明）雇傭期間（二字不明）六ヶ月間は鏝一文も支給されず期間（一字不明）満つれば左様ならの一言に放り出されてしまふ人夫請負人は一人に付き六十人分の手（一字不明）料になるので其手（一字不明）料を目當に恐ろしい手段で人夫を駆り集めかうした惨害を繰り返してゐる

（東京電話）

大正十一年六月二十七日岩手日報五面

賃金を横領逃走

土方の血を吸ふ鹿嶋組の配下

富山縣射水郡横田村大字横田第一二八三當時同縣岩永郡大川谷村竹内福次郎方石工木澤事辻長造（二二八）は昨年十月より本年二月迄鐵道省橋場線及盛宮線鐵道工事請負者東京鹿嶋組配下小林和平の下請負人として飯場を持つ人夫を役し同工事に従事中江刺郡玉里村生れ菅原三次外十名の労働賃金全額は和平より代理受領し乍ら其の一部のみを支拂殘金二百十七圓九十錢を横領の上本年二月十二日逃走したる事發覺盛岡署の手に捕はれ取調の末横領罪として送檢さ

る。

資料を見ていて特に目立ったのが、以上のような一九二二（大正十一）年六月のブルーカラーに関する記事である。一九二二（大正十）年の記事もすべて確認できたわけではないが、こうした記事が集中している点を見ると、「カイロ団長」制作年を一九二二（大正十）年よりも一九二二（大正十一）年以降とすることも不自然ではないようである。宮澤がエスペラントに触れたのが一九二二（大正十一）年の『改造』で「カイロ」の語が関係しているとした場合にもやはりそう考えられる。

次の記事は上記の記事から二か月後のものである。

大正十一年八月二十五日岩手日報五面

酒の値上

来月早々

（二字不明）西地方の酒の価格は目下保合の姿であるが本縣は品手薄の處へ鐵道工事其他で多数の土工人夫が入り込み需要が頓に増加したので益々品不足となり値上説が弗々組合内に傳へられて居たが本月は酒造税納期なので此顧問を越えて来月早々石十圓値上に内定した

この記事を見ると、岩手では一九二二（大正十一）年に、鉄道

工事の増加が土工の増加、酒の需要増、酒の値上げにつながって  
いたことが分かる。当時の『岩手日報』には赤玉ポートワイン、  
ヘルメスウイスキー、キリンビール他酒の広告が散見する。例え  
ば一九二二（大正十一）年のヘルメスウイスキーの広告文は「熟  
成せるその香味／＼……知る人ぞ知る／＼これ世界の名酒」といっ  
たものであった。当時はアメリカの禁酒法（一九二〇）、日本の  
未成年者飲酒禁止法（一九二二）が施行されて間もなく、日米と  
もに禁酒の傾向、悪しき酒という風潮があった。

『新聞集成大正編年史』によれば、一九二二（大正十一）年八  
月九日付『東京朝日新聞』に「監獄部屋踏査／農商務省から鑛山  
へ技師派遣」の見出しの記事が載っている。また、同年八月三一  
日の『読売新聞』には「監獄部屋につき全国的に検事局が大活動  
／投書頻々と舞込み犯罪の有無を調査」の記事が載る。一九二二  
（大正十一）年に「監獄部屋」関連の報道が集中し始めたことは  
間違いない。

#### 四

「カイロ団長」は子供のための童話であるはずだが、酒が登場  
する。「未成年者飲酒禁止法」が一九二二（大正十一）年三月  
三〇日に制定されており、推定されている作品の制作年に近いた  
め、関連が考えられる。また、川又一英『ヒゲのウキスキー誕生  
す』によると、一九二九（昭和四）年四月一日に日本初の本格ウ

イスキーが発売された。この白札サントリ―発売時の新聞広告に  
「醒めよ人！ 舶来盲信の時代は去れり 酔はずや人 吾に国産  
至高の美酒 サントリ―ウ井スキーはあり！」と書かれた。逆に  
言えばこの一九二九（昭和四）年までは舶来品をありがたがる風  
潮があったということである。とのさまがえるの舶来ウイスキー  
は当時において、より価値ある物であった。作品内のウイスキー  
が石油缶に入っていることはその品質を疑わせるギミックであろ  
う。「動物寓話」と作者自身によって名づけられた「カイロ団長」  
だが、こうした点からは大人のための童話といった印象を受け  
る。

王様の命令後、チェッコというあまがえるは計算を始める。こ  
うした計算の記述は他の童話にも描かれている。その意図は読み  
手への算数指南と考えられる。仮にこの作品の制作を一九二二  
（大正十一）年とするなら、宮澤が東京から戻り教師となった時  
期である。「カイロ団長」では「ウイスキー」「ウェクー」のよ  
うに同一のものを指しながら表記の違う語が登場するが、こちら  
は言葉を学習させるためではなからうか。

「カイロ団長」を読む時、読者にとって一番引っかけるのは唐  
突な王様の命令であろう。この命令はちくま文庫『宮沢賢治全  
集』に指摘される通りデウスエクスマキナ（機械神）的である。  
デウスエクスマキナとは演出技法のひとつで、脈絡なく登場す  
るのが問題を解決してしまうことである。先行研究を見ても、

「ハッピーエンドは何によって齎されたのか。言う迄もなく、王様の新しいご命令によってである」（工藤哲夫<sup>10</sup>）、「事件の解決は王様という権威者の出現によってなされ、いわゆる他力的である」（黄英<sup>11</sup>）とされている。

しかしながらこの王様の命令は、宮澤の提示する問題の真の解決法となっていないことに注意すべきであろう。確かに王様の命令はあまがえるたちを解放する契機となった。しかし、その後カイロ団長に労働を課し、その足が折れるだけでは真の解決でないと宮澤は言っているのだ。団長を笑ったその後、あまがえるたちが「ドットと一緒に人をあざけり笑ってそれから俄かにしいんとなった時のこのさびしいこと」を知ったのは自発的なものであった。プロットを正確に酌むと、王様の二度目の命令が来るのはその後のことである。王様の二度目の命令がどれだけ自覚的なものであったのかは明らかでない。この脈絡のない解決の契機と、それによって真の解決がもたらされない点では、生前発表されている「オツベルと象」や「猫の事務所」とも共通する。

宮澤賢治童話において、主要事件解決の契機と真の解決は別物である。お話の中で大きく取り上げられた事件が解消されるだけでは宮澤は満足していない。王様の命令、獅子の命令、赤い着物の童子と象の襲撃などの「きっかけ」と、嘲笑う淋しさ、半分同感、さみしい笑いといった——佐藤泰正の言葉を借りるならば——「作家の声」は区別されなければならない。

とのさまがえるは二つの意味で失脚（金銭としての脚、実際の足）し、仕立て屋になるという。不況時に服の買い手は無いもので、少なくとも利益第一の職ではないだろう。とのさまがえるは他の仕事をする。あまがえるは元の仕事がある。「猫の事務所」のかま猫は仕事に誇りを持ち、「オツベルと象」の象は労働に捕らわれている。これらは仕事から離れることが出来ない。これを見ると、宮澤は中央の文壇からは遠くとも、現実に基づいた創作をしていたことが分かる。何故宮澤は労働を取り上げるのか。

『赤い鳥』に代表される童心主義童話に対して指摘されることではあるが、宮澤においてもやはり「大人のための童話」という性格はぬぐえない。宮澤は諸作品の中で、労働における負の側面、強制労働等を多分に描き出している。作品の中でつらい労働は否定されるが、楽しい労働への希求も同時に描かれている。「猫の事務所」末尾の「半分獅子に同感です」とは、単純に、楽しい労働さえも奪い去った獅子への批判ではなかったか。また、宮澤が労働について文字を費やすとき、作品に見られる宗教的要素が希釈され、作品全体からくどさを失くしているのは思いがけない効用である。

注

- (1) 赤羽学「宮沢賢治『カイロ団長』の不法販売」『文芸研究』第一四二集、一九九六年九月三〇日、五二頁。

- (2) 赤羽学、前掲書、六一頁。
- (3) 峰芳隆「宮沢賢治におけるエスペラント」『国文学解釈と鑑賞』第六五巻二号、二〇〇〇年二月一日、一五頁—一六頁。
- (4) 原子朗『定本宮沢賢治語彙辞典』筑摩書房、二〇一三年八月二〇日、一二四頁。
- (5) 池田知久訳注『莊子（上）全訳注』講談社、二〇一四年五月九日、九八一頁—九九八頁。
- (6) 続橋達雄「カイロ団長のことなど」『四次元』第一七巻第六号、一九六五年七月一〇日、三七四—三七五頁。
- (7) 小沢俊朗「賢治の社会批判」『四次元』第六巻第四号、一九五四年四月一〇日、一二二—一二六頁。
- (8) 永井秀夫他編『明治大正図誌第五巻北海道』筑摩書房、一九七八年三月一〇日、九一頁—百頁。
- (9) 筆宝康之「建設業における労資関係制度—『監獄部屋』をめぐる—」『経済学研究』第二二巻第一号、一九七一年八月、一〇八頁。
- (10) 筆宝康之、前掲書、一五〇頁。
- (11) 筆宝康之、前掲書、一五〇頁。
- (12) 筆宝康之、前掲書、一六二頁。
- (13) 筆宝康之、前掲書、一六七頁。
- (14) 対馬美香「宮沢賢治新聞を読む—社会へのまなざしとその文学」築地書館、二〇〇一年七月二五日。
- (15) 川又一英「ヒゲのウキスキ—誕生す」新潮社、二〇一四年七月一日、一八四頁。
- (16) 工藤哲夫「宮沢賢治『カイロ団長』小論—撰折問題の観点から—」『研究紀要』第五号、一九九二年三月二五日、五一頁。

(17) 黄英「宮沢賢治テキストにおける批判の様相」『Comparatio』Vol.6 二〇〇二年五月二〇日、xxix頁。

頼富 雅樹（よりとみまさき） 大学院博士前期課程在学